

平成21年6月29日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730340
 研究課題名（和文） 日本における地下鉄の誕生とモダニティ経験の変容にかんする文化・歴史社会学的研究
 研究課題名（英文） A Sociological Study on Introduction Process of the First Subway in Japan
 研究代表者
 近森 高明（CHIKAMORI TAKAAKI）
 日本女子大学・人間社会学部・講師
 研究者番号：10411125

研究成果の概要：本研究課題では、1920年代東京における地下鉄の導入過程について、テクノロジーに内在化される論理と都市の多重的リアリティとの接合という観点から考察した。①早川徳次の構想が高速鉄道網の策定と結びつく経緯、②路面電車の導入過程との比較、③デパートとの連携と地下鉄ストアの設立、という三点の検討をつうじて、統計的都市のリアリティに準拠する一連の知と想像力が地下鉄の構想と接続し、新たな都市的現実が生み出されてゆく動態を照らした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	150,000	1,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：社会学、都市空間、モダニティ、地下鉄、テクノロジー

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想に至った経緯

本研究課題の着想に至る経緯は以下の三点にまとめられる。

①モダニティ経験の再考という問題関心

研究代表者はこれまで一貫して、モダニティ経験の再考という点に問題関心を抱いてきた。都市のモダニティ経験について、従来では、W. ベンヤミンやG. ジンメル、S. クラカウアーを中心に、視覚の優位や知性の支配、経験の断片的・一時的・流動的性格といった

特徴が主に論じられてきた。だがモダニティ経験には、それらに還元されない別様の位相（無意識や存在にかかわる位相）があるように思われる。そうした関心から研究代表者は、以前に、ベンヤミンの《遊歩者》という人物形象に注目しつつ、周囲から距離化した《観察者》と距離化の不能な《陶醉者》という二局面という論点から、都市のモダニティ経験を再考するという趣旨の論考を提出した（近森高明『ベンヤミンの迷宮都市——都市のモダニティと陶醉経験』世界思想社、2007年）。

②知覚や感性をめぐる社会史・文化史的研究
研究代表者はまた、モダニティ経験の再考という同様の関心から一連の社会史・文化史的研究を展開してきた。とくに主題として注目してきたのは、モダニティ経験の変容を指し示す契機や徴候とみなしうるような、知覚や感性や身体感覚の水準にかかわるマイナーな文化現象である。具体的には「大正期における《神経衰弱》の流行」「街路での牛馬虐待をめぐる動物愛護運動の展開」といった主題について、専門知から社会的想像力にわたる各種領域の言説を素材とする経験的研究をおこなってきた。

③新たな《都市の技術社会史》の構想

以上の二つの問題系列の交点として、研究代表者は、都市空間への各種テクノロジーの導入過程をめぐる《都市の技術社会史》というパースペクティブを構想してきた。ごく単純に図式化すれば、以下のような見方を基本線として考えている。(a)テクノロジーは中立的な道具ではなく、都市空間への導入過程において独自の技術的論理を胚胎する。(b)その技術的論理は既存の都市的现实に干渉して屈折や屈曲をもたらし、多重的な効果をあらわす。(c)そうしたテクノロジーの導入過程を、技術・社会的想像力・空間知覚の変容という観点から検討することで、都市のモダニティ経験の構成と内実について新たな知見がえられる。

このパースペクティブに基づく試論として、研究代表者は、1920年代における街路空間への照明技術の導入過程を扱った論考をまとめている(近森高明「街路空間における〈光〉の管理化」『社会学評論』55巻4号, 2005年)。

本研究課題は、こうした《都市の技術社会史》のパースペクティブに基づきつつ、照明技術に引き続いて「地下鉄」という交通テクノロジーに注目したものである。あらためて確認すれば、この視座は「モダニティ経験の再考」という理論的線分と「知覚や感性をめぐる社会・文化史的研究」という経験的線分の交点にあたるものである。

(2)国内外の研究動向と位置づけ

本研究課題にかかわる国内外の研究動向は以下の四点にまとめられる。

①モダニティ論と都市空間論

都市空間の内実と構成について、モダニティ経験の再考という観点からアプローチするという本研究課題と(理論的水準において)通底する問題意識をもつものとして、A. ヴィドラーやS. パイルらの研究があげられる。ヴィドラーは『不気味な建築(The Architectural Uncanny)』(1992)や『歪ん

だ空間(Warped Space)』(2002)のなかで、近現代の都市空間に表象される都市居住者の不安や居心地の悪さについて、美学や建築批評など複数領域を横断しながら論じている。またパイルは『身体と都市(The Body and the City)』(1996)などにおいて、人文地理的方法に精神分析的視角を接合させ、都市空間について、主体や欲望の問題とも連動したかたちでアプローチしうる独自の分析枠組みを練りあげようとしている。

②社会史・文化史的な地下空間論

豊富な事例を紹介しながら、地下空間をめぐる社会的想像力の変容を歴史的に扱ったものとして、R. ウィリアムズ『地下世界(Notes on the Underground)』(1990)があげられる。だがこの代表的研究以外にはまとまった研究は少なく、単発的に出されるものがほとんどである。

③都市の技術社会史

都市空間に埋め込まれる基盤的技術(水道、ガス、照明、通信、交通、道路、等々)を対象とする社会史的研究は、近年、欧米の文脈を中心に精力的な展開がみられる。それらは個々の都市や街に個別的技術が導入される歴史のプロセスをたんねんに追ひ、現代生活をもたらした社会変動の技術的次元を問おうとする研究群である(たとえば『都市とテクノロジー(Cities and Technology)』と題された研究書シリーズなど)。日本の文脈では個別的事例研究はいくつかみられるが、都市とテクノロジーの問題に総体としてアプローチするという動きは明確なかたちでは出てきていない。

④地下鉄の歴史的研究

各国の地下鉄をめぐる個別事例を対象とする歴史的研究は、比較的数多く提出されている。ロンドンをはじめ、パリ、ボストン、ニューヨーク、モスクワ、等々の各都市の地下鉄の導入過程については、技術面や政策面、また社会的受容や想像力にかかわる面も含めて、さまざまな視点から検討されている。一方、日本国内の事例については、おもに早川徳次という人物に注目した伝記的研究か、モダン風俗の一部(カフェや百貨店などと並ぶ)として扱う文化史的研究、あるいは交通政策史的研究などに分かれ、幅広い社会的・歴史的文脈に位置づけて論及しているものは少ない。

以上のような研究状況を背景として、都市とテクノロジーの内的連関およびモダニティ経験との接続という観点から、地下鉄の導入過程にアプローチする本研究課題は、①モダニティ論と都市空間論、②社会史・文化史

的な地下空間論、③都市の技術社会史、④地下鉄の歴史研究、という複数の領域にまたがるかたちで、オリジナルな理論的・経験的貢献を果たしうるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下の三点にまとめられる。

(1) 地下鉄の導入過程をめぐる歴史的調査とその社会的効果の考察

1920年代東京における地下鉄の導入が、いかなる主体により考案され、どのような経緯をたどって議論され、計画が立てられ、調査が実施され、特許が申請され、その必要性や効能が社会的にアピールされたのか、等々の具体的な歴史的プロセスを追うことで、その導入をめぐる《地下鉄言説》の全体像と特質を把握すること。そのうえで地下鉄というテクノロジーに内在化された独自の技術的論理を析出し、それが既存の都市的現実の内実と構成にどのような影響を与えたのかを多角的に精査すること。これが本研究課題の第一の目的である。

(2) W. ベンヤミンの都市論的思考の再検討

本研究課題は、直接的には、1920年代東京における地下鉄の導入プロセスという個別具体的な歴史的現象を扱うものであるが、より大きな問題意識としては、都市のモダニティ経験の再考という、研究代表者の以前からの基本的関心に根ざしている。そうした関心を理論的に追究するため、本課題では、経験的研究と並行して、理論的研究にも積極的に着手している。とくに都市のモダニティ経験を論じたテキストとしてもっとも頻繁に参照されながらも、必ずしもその意義が十分に汲み尽くされているとはいえないベンヤミンの都市論的思考を、あらためてその多重性において再検討することを試みている。これが第二の目的である。

(3) 新たな《都市の技術社会史》の構想

本研究課題は、より大きな文脈としては、新たな《都市の技術社会史》を構想するという研究代表者の問題意識のもとに位置づけられる。既述のように研究代表者は、この関心からすでに街路空間への照明技術の導入をめぐる問題を扱っており、地下鉄を主題とする本課題はその試行の延長線上にある。それゆえ本課題は《都市の技術社会史》というパースペクティブに基づく事例研究であると同時に、その視座をより精緻化し、より広範に適用可能な方法論的視座に鍛えあげるという企図をも含んでいる。これが第三の目的である。

3. 研究の方法

本研究課題の方法は以下の三点にまとめられる。

(1) 地下鉄導入をめぐる言説状況の経験的調査

まずは1920年代東京における地下鉄の導入プロセスをめぐる《地下鉄言説》の全体像と特質を把握するために、各種領域にわたる歴史資料を経験的に調査した。それら各種の資料は以下のように大別される。まず地下鉄を直接的に主題とするものとして、(a)地下鉄導入にあたり主導的役割を果たした早川徳次による言説、(b)地下鉄の必要性と有用性を論じる一般向け解説書、(c)地下鉄の技術的詳細を論じる工学専門書、(d)地下鉄を扱った一般向けの雑誌や新聞の記事。つぎに都市交通問題を主題とするものとして、(e)都市政策・都市工学・鉄道政策にかかわる専門雑誌、(f)「東京市内外交通調査会」による高速度交通機関網の整備計画。さらに先行する都市交通機関の諸形態との比較のために、(g)馬車鉄道や路面電車(市電)などを主題とする各種資料も調査した。

(2) W. ベンヤミンの空間的／イメージ的思考の検討

つぎにモダニティ経験の再考という目的のもと、ベンヤミンの都市論的思考を再検討するにあたり、とくに空間的／イメージ的思考という論点に注目して理論的考察を展開した。なかでもアレゴリー的視線により解読される痕跡、ミメシス状態のもとで判読される徴候、等々、言語とイメージの境界にある《文字＝画像》をめぐるベンヤミンのいくつかの理論的モチーフを整理し、その意義と可能性を検討した。

(3) 研究枠組み構築のための文献整理・検討

さらに新たな《都市の技術社会史》を構想するという目的のもと、関連領域の既存の研究文献について整理・検討した。具体的な領域としては、まずは都市を主題とするものとして、(社会学的／人文地理学的／美学批評的／建築論的／人類学的／文学論的／文化研究的)都市論／都市研究、都市の社会史、等々を検討した。また技術を主題とするものとして、L. マンフォードやM. マクルーハンなどの文明論的技術論、M. ハイデガーなどの技術哲学、F. キットラーやP. ヴィリリオなどの技術／メディア論、技術の社会構築主義的研究、アクターネットワーク理論、技術の社会史、等々を検討した。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果は以下の三点にまとめられる。

(1) 地下鉄の導入過程を対象とする経験的研究にかかわる成果

本研究課題の主要な目的である、1920年代東京における地下鉄の導入プロセスを対象とした研究成果として、都市とテクノロジーの相互陥入という視座から考察する論考をまとめた（「地下鉄のなかの都市」）。①早川徳次の初期構想が高速鉄道網の策定と結びついてゆく経緯、②路面電車の導入過程との比較、③デパートとの連携と地下鉄ストアの設立、という三つの点の検討をつうじて、統計的都市のリアリティに準拠する一連の知と想像力が地下鉄の構想と接合し、新たな都市的現実が生みだされてゆく動態を照らしたものである。

(2) W. ベンヤミンの都市論的思考を対象とする理論的研究にかかわる成果

ベンヤミンの都市論的思考を主題的に扱った研究成果として以下の五点があげられる。①拙著『ベンヤミンの迷宮都市』への書評リプライとして、モダニティ論と精神分析の接合という理論的関心を提示した（「書評に答えて」）。②概説書向けにベンヤミン『パサージュ論』の内容紹介をおこなった（『社会学ベーシックス 4 都市的世界』）。③共同研究「ストリートの人類学」（代表・関根康正）の報告書向けに、「痕跡」概念から遊歩者の陶醉について読み解く試みをおこなった（「遊歩と痕跡」）。④H. ルフェーヴルとベンヤミンのイメージ概念を比較・検討する報告をおこなった（「ベンヤミンとルフェーヴル」Cultural Typhoon 2008 in Sendai）。⑤ベンヤミンの概念《弁証法的イメージ》の形成過程をたどりつつ、その両義性の由来を探る試みをおこなった（「直接性を迂回する」）。

(3) 新しい《都市の技術社会史》の構想にかかわる成果

都市空間に各種のメディアが埋め込まれてゆくプロセスを歴史的にたどった Scott McQuire, *The Media City* (2008) の書評論文を執筆した（“Between the ‘Media City’ and the ‘City as a Medium’ ”）。

以上の成果はいずれも①モダニティ論と都市空間論、②社会史・文化史的な地下空間論、③都市の技術社会史、④地下鉄の歴史研究、という複数の領域にまたがるかたちで一定のインパクトを与えうるものと考えられる。今後は引き続き、モダニティ経験の再考という基本的な問題意識を踏まえながらも、

とくに都市空間への各種テクノロジーの導入過程をめぐる《都市の技術社会史》というパースペクティブのもとに、理論的・経験的研究を展開してゆく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① CHIKAMORI, Takaaki, “Between the ‘Media City’ and the ‘City as a Medium’”, *Theory, Culture & Society*, 26 巻 4 号, 2009 年, 掲載頁未定, 査読無 [掲載予定] .
- ② 近森高明 「地下鉄のなかの都市——1920年代東京における地下鉄の導入過程について」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』15 号、2009 年、1-15 頁、査読無。
- ③ 近森高明 「直接性を迂回する——ベンヤミンの《弁証法的イメージ》について」『Becoming』23 号、2009 年、43-70 頁、査読無。
- ④ 近森高明 「書評に答えて」『ソシオロジ』52 巻 3 号、2008 年、227-231 頁、査読無。

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 近森高明 「ベンヤミンとルフェーヴル——対抗空間に付随する《イメージ/言語》の問題圏をめぐって」Cultural Typhoon 2008 in Sendai、2008 年 6 月 28 日、於せんだいメディアテーク。

〔図書〕（計 2 件）

- ① 関根康正編『ストリートの人類学』上巻、国立民族学博物館、2009 年、53-71 頁。
- ② 井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 4 都市的世界』世界思想社、2008 年、115-124 頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近森 高明 (CHIKAMORI TAKAAKI)
日本女子大学・人間社会学部・講師
研究者番号：10411125

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし